

第1回社協八木山連合支部福祉懇談会議事録

日時：6月5日（日）午前9時30分～

場所：松が丘コミュニティーセンター

（出席者）

社協八木山連合会支部長、副支部長、各務原市社会福祉協議会職員、福祉推進員
松が丘自治会長、つつじが丘自治会長、民生児童委員、主任児童委員、近隣ケア代表
長寿会会員、社協八木山連合支部事務局の参加者43名

- A：お忙しい中、こうしてたくさんの方が福祉懇談会に参加くださりましたこと感謝申し上げます。昨年までの福祉懇談会では、参加者のみなさんから意見を伺うという所で留まってしまっていたと聞いております。その意見を踏まえて今年度は具体的に方向性を示していけたらと考えていますので、活発な意見交換をお願いします。
- B：先日は近隣ケア研修会に近隣ケアの方々だけでなく、多くの自治会長さんに参加していただきありがとうございました。さて八木山地区においては、福祉懇談会などの意見交換を通じて、みんなで福祉の問題、特に高齢化への問題に取り組んでいこうという機運が高まっているのを感じます。尾崎や緑苑といった地区も八木山同様、高齢化がますます進んでいくことが懸念されています。これらの地域も現在、具体的に何かを取り組みをしていこうとしているところです。このような地区の情報をお伝えするなどし、協力していきたいと思っています。
- C：資料を2部用意しました。昨年の理事会、懇談会で使用したものと同じですが、平成22年の八木山地区の65歳以上人口と10年後の人口の予測が示してあります。これによると昨年の65歳以上の割合は25%であるところ、9年後は44%になります。また一方では世帯数が横ばい状況なのが分かるので、若い人が減っている状況も知ることができると思います。こうしたデータを議論のベースにさせていただくと幸いです。
- D：「高齢化対策及び福祉活動について」提案させていただきました。長年近隣ケア活動をされた方、民生委員の方をおいて先に話をさせていただくのは恐縮ですが、『向こう三軒両隣 ネットワーク確立に向けて』の提言をさせていただきたい。
- 私は、福祉活動を2つに分けて考えています。一つ目は、各地、各団体でイベント、行事、サークル活動にみなさんが参加する。それぞれの住民が知りあう、触れ合う。参加してますます元気になる。そして参加者に見守られている。このような『行事・団体への参加』を通じての活動です。ただし一部の方々には、参加されなければその恩恵に与ることができないので、不参加者への取り組みが課題として残ります。
- 二つ目は、『支援』です。日常の生活の中で突然急変する。心臓に、脳に疾病がでたり、転倒したりと予期していないことが起きることがあります。助けてほしいと呼んでも、一人暮らしであればその声は届かない。家族があっても家にいないとそのままになってしまう。そういう信号を誰が感知するか。ご近所の方々がそれを察知することになるでしょう。急に雨、洗濯物はそのまま、変だな。知らせてあげよう。テレビの音がする。ドアを叩く、開く、家の中を見よう、“発見”救急車を呼ぶ。
- ・どこまで隣へ踏み込むことができるか、呼び鈴→留守かなで終わる。ドアを開く、おかし

いな留守なのかで終わる。確かに室内までいくのは現実的には難しい。課題としてはご近所付き合いを日頃からどうしているのかという所。

- ・サークル活動をしている方で、昨日参加するといったのに来なかった。おかしいな、訪問したら寝込んでいたという場合もあるでしょう。ただそういう趣味のつながりが無い“ご近所”の場合、どこまでやればいいのか。

応急、再発防止をネットワークでフォローしていきたい。その中心になるのが“自治会”。その中でも密着しているのは“組長（班長）”。組長が再発するのを気にかける。近隣ケアに相談を持ちかけておく。いざという時は組長から自治会長に。自治会長は民生委員に判断してもらう。そこから市の組織、支援センターに相談してもらう。“組長を中心にしたネットワークの構築”ができないか。

そのための課題を3つ示すのでみなさんで考えていただきたい。

1. どこまで踏み込めるのか？プライバシーの保護の限界について 子どもの頃は家に上がって話す。家に上がって情報を得るということがあったが、現在はそういう状況になっていない。プライバシーをどうするか、捉えればいいのか。
2. 組長以外にも“助けてほしい”という緊急事態をどうやって感知するかの方法について 近隣ケアの人、ボランティアの活動を充実する方法。
3. 近隣ケアの方々にごどこまで支援を求められるのか、どこまでやってもらえるのか。

E：近隣ケアがどこまで支援することができるかについて。近隣ケアの活動は近所の方を見守り、大丈夫かということについて、民生委員に報告する・察知する役目です。自分たちの生活もあるので、見守り活動が限界。

F：松が丘1～7丁目の近隣ケア活動も見守りが基本。家庭訪問もしているが見守り、声かけ中心。

G：民生委員は、近隣ケアさんからの情報や自分で町を歩いて見守りをしています。これからは高齢世帯が増加することもあってちょっとした情報にも気を配る必要があると考えています。

F：私の担当地区であった独居高齢者の話をします。見守り活動の中で全く自動車が車庫から動いていない状態が見受けられた。組長にお願いし、民生委員さんに連絡。その後、病院に入院していることが分かったということがありました。

H：事例としては、70代の方でプールに歩いて通うほど元気な高齢者。前日まで元気だったのに、室内で倒れていた。電話しても出ない。明日動きが無かったら家の中を見ようとしていたところ、同様に電話を架けていた兄弟が来て発見。冬場であったがたまたま電熱器が近くにあり、暖がとれており大事に至らなかった。今は名古屋の施設に入所したケースがある。また日頃きっちり生活されている方のところで、回覧板が側溝に落ちていた、おかしいと思ったので、裏から入って声をかけてみた、呼んだら声がある。体調が不良で自分がどうして動けなくなっていたのかわからないということもあった。

I：組織にこだわらず、住民全員が共通の思いがあると良いが。

H：造花を玄関に朝置く、夜になると引くという取り組みをしている自治会がある。いろいろ尋ねることもないし、身体の悪い人は別の置き場を決めて実施することもできる。

I：住民の皆さんは、何らかの新聞、郵便、牛乳など毎日配達されている。そういった事業所と

連携してネットワークを作る。おかしいと思われる場合どこへ連絡をいれるかまでの調整をしておく。自治会からお願いができないものか。

E：ゆうちょなどにそこまでをお願いするのはちょっと大変かなと。その前に密接に生活している我々の足元を固める方向で考えましょう。

J：日常の生活の変化を察知するアンテナは複数あったほうがいい。向こう三軒両隣、近隣ケア、長寿会、どれかがカバーしたってよい。身体に緊急事態が起きている場合、時間が勝負となる。民間の通報システムを入れている方もある。

K：自治会が組長・班長が核となってその組織作りをしていこうとしているのは非常によい方向づけ。先ほど民間の通報システムの話があったが、一人世帯に限られるが、緊急通報システム貸与が市の制度としてある。あまり広く知られていないが民生委員が勧めている。また災害時要援護台帳などの登録を同時に勧めて支援の態勢を強化しています。

L：見守り活動を通じて知り合いがたくさんできました。75歳以上の方々に限らず、いわゆる隣同志仲良くしていきましょう。プライバシーの問題と言われますが、本当に仲良くなっていれば知ってもかまわないということもある。仲良くなれば向こうから話してくれるようになる。その人を通じて別の人の情報を得るということもある。組長は少なくとも回欄や広報をポストに入れてしまえば早いですが、年配のいる世帯の時は世間話をしながら配る。こういうところから始めていこうではないですか。

M：25、6年前は、回覧板をポストに入れず手渡すことになっていた。いないときは隣の家に持っていき、飛ばしていた。

F：1～7丁目まで組長会に民生委員と近隣ケアがお邪魔して話をした。ひと声かけてという取り組みをはじめたところです。

N：民生委員は3年の任期その間がんばらなければと思っている。自治会長の任期は1年。つつじが丘も松が丘も同じ。皆さんも任期の間できるだけことはやろうと思っている。その後を受ける者にとっては、前任者の理念、方針を受け継いで活動をする。引き継ぎがうまくできる組織体制作りをまずお願いしたい。それから福祉活動となると民生委員にスポットが当たることが多いが、民生委員一辺倒になっては限界がある。この地区は坂や階段が多い。身体が衰えると生活しにくい環境になってしまう。身体を鍛えて、健康で長生きするためには、スポーツを通じたサークル活動が充実される必要があると考えている。体育指導委員の任期は本来2年なのだが、この地域は1年交代。任期を通常どおりにし、もっとスポーツを通じた健康活動に注力することができたらと思う。

O：いま自治会の中に見守り活動をしているところはたくさんある。高齢対策に携わる人だけではない。八木山地区で考えていく大きな問題になっている。

1年で自治会長などの役が変わるのも意味がある。人が変化していてもそれまでの活動を引き継いでいけるようにするためには事例等の具体的な対応の経験値であったり、組織的に動いたときの対応ノウハウを継承する必要がある。一生懸命やっているボランティア活動の実態を町内で話をしてもらって広報するのは一つの手法であろう。つつじが丘には福祉委員会があるのでここが情報を吸い上げるのがよいと思う。また組、班で具体的に何をすべきかを話しをするのも重要な手法。1年毎に代わっても情報を共有しあえば災害対策にもつながる。今日のこの会議は、熱意があって運営されていることをうれしく思う。

L：災害時要援護台帳を作成するに当たって私の担当地区の1つでは8人の高齢者について地域

で支え、誰が誰を避難させるのかというように表をつくった。またもう一つの担当地区も同様な取り組みをしており、**そちらは13人を対象としています。**

P：対象者の方を表にして、住所、氏名、電話番号等の基本情報の他、支援してもらい内容等を聞きとっている。そして地域で支援しておく人をきめて1人1支援者で対応することになっている。市にも登録を済ましており、自治会役員が変わればまた再度登録することになる。今後はこれを発展させ、どのように具体的な支援していくか、班長さんの仕事としての位置づけを検討していきたい。

N：組織体系をしっかりと作れたらいいと思う。

B：支部社協活動の手引きを見てください。7ページに福祉の現況が、8ページには、支部社協がめざすもの・地域でできることが、9ページ以降に今日開かれている福祉座談会の進め方が記載されています。問題を出し合って意見をお互いに聞くというのも解決に結びつけるきっかけになります。自治会長は1年の任期という問題がありました。このように期間が短いとどこの民生委員はどんな顔をしていたかなというように知る機会が大事になります。それぞれの地域で持ち帰って話をしてもらおうという話もありました。先ほど造花の例がありましたが、雄飛が丘で実際に取り入れている例もあります。孤独死があったことを契機にして、今後はそれだけは避けたいということで、8軒で取り組んでいます。人間のやることですから玄関に出すのをわすれることもあります。それはそれをきっかけにして声をかける。具体的な方法はそれぞれの地域の実情に合わせてになるでしょう。意識的な声掛けをしていこう、何かあったときには近所の方、自治会長に声をかけて訪問する。民生委員さんの抱える範囲は広域になるから、そのネットワークのつながりとして、近隣ケア、福祉委員が存在している、こんな問題が起きた時にはこういうことをしようというのを明文化していくのも手かと思えます。

Q：回覧版、広報などは月1回でも顔を見て渡す。地域に持って帰ってもらって是非実践できるように検討してほしい。

M：自治会の役員は1年で交代してしまう。1年で何をするかといえば、次に渡して伝えていくことかと思っている。社協のパンフレットを見せてもらって、すぐ見て分れということも難しいが、何かやろうと組織的に取り込もうとするのは大事だと伝わる。これは（超高齢社会を迎えるに当たって市からの）トップダウンで示された課題なのが、ボトムアップの課題なのか？そもそも支部社協のことだと分からない。

B：社協の概要の説明がなされる。当然ボトムアップです。自治会長さんに対して福祉のあれこれについて、これしてくださいというものではない。

M：自治会もあれば、この地域にはまち協もある。いろいろな課題を考えるに当たってはできるだけ組織を一本化した方がわかりやすい。福祉のこともまち協が一部担っているという認識があり地域の組織についてわかりにくい。

R：まち協の成り立ちとしては青少年育成からスタートという歴史を持ちます。これから街をつくっていくときの中心に青少年育成という課題があったからだと思えます。まち協の活動には大きな行事が4つあります。4大行事を通じて「ふるさとづくり」に繋げています。しかし現状は行事をこなすだけで精一杯。互いの組織の連携させ、有機的に活動を深めようという意欲はもちろんあります。一方で役員についても高齢化問題がクローズアップされている現状があることをご理解ください

- M：今日のこれまでの話を聞いて自治会としてどこまで踏み込んでいいのか分からないのが感想。高齢者を取り巻く環境がそれぞれであって、個々によっても違う。各々で見えていくことが有効なんだろうと思う。一方で組長も高齢化している現状がある。これから厳しくなるな、そういうことも感じる。
- N：歴年行ってきた4大行事は素晴らしいと思う。各団体が集まって健康的に全員参加をもとにしてふれあいの機会をつくっている。福祉活動を通じてよりよい街をつくっていかうというのが趣旨。
- R：ボランティア的な近隣ケア活動は、それぞれのボランティアさんの生活の無理の無い範囲内でやっていて、まち協にもその活動に携わる人たちのボランティアで成り立っており、そこにも当然限界がある。それぞれの主体性を持って取り組んでいく必要があると感じた。理論闘争になるのは避けたい。自治会も住民からの盛り上がりがないと課題として捉えることができない。今日の会議を通じて高齢問題について盛り上がりにつなげていくというのが大事。今日の会議の内容を自治会に持ち帰って話をしたい。
- E：日々の活動をきめ細やかにやっていただき、漏れを無くす。是非班長、組長さんをお願いしたい。
- O：まち協やその他の関係団体の活動も重要だが、高齢化についての問題については具体的に社協がその中心を担っていくことになるでしょう。自治会やまち協では行事に追われ無理がでてしまう。1年交代の役員人事ではあるが、これはこれで大事であって、うまく継承していけばいい。また大きな災害があった後ではあるし、災害についての関心が高い時期でもある。避難を必要とする際に、実際に動けない人がこれだけいるということ把握するには良い時期かもしれない。各自治会で話しあってもらって、現状の支援体制からバージョンアップできる時期だと思う。
- S：向こう三軒両隣のネットワーク構築という問題点が挙げられているが、今日はどういう会議なのかもう一つはっきりしない。次は今日の意見を吸い上げてどういう風に会議を終わらすのか、意味があるのはわかるが、位置づけがわからないが。
- A：話を聞いていて、前にすすんでいるのを感じる。Dさんからの提言にあったプライバシーの問題についてもこの会議を通じて解決した。近隣ケアはプライバシーには踏み込まず、見守り支援だとの答えが出たのも成果。向こう三軒両隣のネットワーク構築については、それぞれの自治会が班長、組長の協力を得て、顔を見て回覧板を渡そうだとかいう活動を通じて強化を図るための提案をそれぞれの自治会でしてもらいたい。このような話が出てきたのも成果であると考え。
- T：近隣ケアの活動や民生委員の活動についてもいろんなノウハウがある。ある程度のノウハウを無しにしては自治会でいきなりというのは無理。次回の組長会議に民生委員や近隣ケアさんに出席してもらい、経験されてきたことを教えてもらい、そのなかでどういう協力ができるかを班長に考えてもらって具体的に対応策を挙げてもらう。各丁内であって、それぞれに合ったプランを作って発表するようにしたい。次回の懇談会の時に具体例を持ってくるように準備できればと思う。このような大きな会議体では具体的な支援方法を探っていくのは無理だと思う。
- L：まずそれぞれの自治会で話し合ひましょう。
- G：でもここで大筋を決めた方がいいでしょう。回欄については直接手渡してもっていってもら

いたいという話ならここで決めてもいいのでは。

M：Gさんの意見に賛成です。組長にお願いしようと思います。活動の原点は自分のできる範囲の中でやってもらうことです。

O：9月に再度この懇談会が開催される予定なので、もう一回話し合ってもいい。それまでに自治会に持ち帰っていいのでは。

U：今すぐできることはスタートしていけばよい。一步一步進んでいけばいい。我々は組長に理解してもらって、協力してもらうようにしていきたいと改めて感じました。

V：この地域にはつつじは丘、松が丘の2つの自治会があり、校区は一つであるから統一してのまち協があって行事を行っています。それぞれの自治会ですべきこともまち協が担い、我々自治会の事務を手伝ってもらっているのが現状。社協が行う活動にしてもそうだが、本来は自治会がやらなければならないこと。松が丘とつつじが丘というように複雑に考えなくて良い。社協の活動も自治会の中にあるもの。声かけなども自治会の活動の一環にあるもの。本来は班長の仕事としてすべきところではあるが、ぐるっと声を掛けながら回るのはきついという班長もいる。それをもっときめ細やかにやってもらうようにすすめるのも自治会。何の団体がどうのというのではない。結局自治会にあるわけだから、複雑な組織があるなんて考えないでほしいと思っています。

A：Sさんのこの会の在り方についての疑問についての回答としては、こういうふうをお願いしたいからというつもりで懇談会を催したものではありません。長年、福祉にかかわる活動、例えばサークル活動的なものも個別の活動であり、提言にあった“支援”という意味での意思統一がされていなかったのではないか。それを連携ができる状態にしていければと考えている。まとめの前に話したい。在宅介護支援センターが各務原市に一つしかなく、携帯電話もない時代の話をしたい。ある民生委員から電話をもらった。おばあちゃんが倒れた、歩行困難で3点杖を使う身体状況。しかしいつまでも病院が預かってくれるわけではなく、仮退院することとなった。ちょうど5月の連休のことだった。仕方なく寝袋をもって泊まった。家に帰るということは身の回りのことを自分でするということ。その高齢者は自分でできると思っている。一方で帰ってくる自宅の周りの方々は火を出す心配があるので困るということで協力が得られない。一旦また病院に戻ったが、その後弟が退院させた。ある日、自宅を覗くと脱水で倒れており、最終的には特別養護老人ホームへの入所に至った。この例は自分が自分の家で住みたいと思っても自分で身の回りのことができからということもあるが、地域として受け入れができない、協力が得られないと生活ができない現状があるということ。今後、ますます高齢化が進んでいった時には、突っぱねることができない。地域がこのような高齢者と向かい合い、生活ができるようにしていくかについてよく考える必要がある。

C：本日の会議は、理念に留まらず、具体的に当地域が今後抱える高齢社会の問題について話し合う場となったことは非常に良かった。話し合われた内容についてそれぞれの自治会に持ち帰っていただき、次回の会議へとつなげていければと考えています。また社協の活動は、会員の皆様＝松が丘、つつじが丘の住民のほとんどの方からの会費で成り立っている。福祉のあらゆる場面で活躍される方を広報紙でお知らせしもっと充実させ、各戸配布としたい。そのためには現在の事務局の体制では厳しいので、今日お越しの近隣ケアの方々にも協力をお願いしたい。

以上